

# 人間教育の普遍的要素を成す音楽科教育における一考察

—中学校音楽科を核とした総合的な表現活動の視点から—

(平成28年8月29日提出, 11月4日受理)

A study on Music Education in Universal element of Humanistic Education  
— From the point of overall representation activities in junior high school —

奈良学園大学人間教育学部

瀧明 知恵子

TAKIAKI Chieko

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：人間教育, 音楽科教育, 歌唱・合唱指導, 総合的な学習の時間

**Abstract** : I think that I must push forward the instructional activity that can cultivate the richness of the heart and the richness of the emotion. I impressed by the music activities foster the rich mind of students to think, they cultivate the power to live. I, for activation of the Music Education considered as follows. First, I understand the situation surrounding the current students, and check the curriculum guidelines of Music Education. By that, I understand, and that it was committed in Music Education, about the significance of music education. And, I consider the activation of music education, through the chorus drama of overall representation activities. I think, we will promote the educational activities that foster the richness and richness of emotional mind, in school life.

**Keywords** : Humanistic Education, music education, singing and choir, the period for integrated study

## I 研究の目的と方法

### 1. 問題の所在

少子高齢化社会が到来し、産業・経済の構造や就職の環境が変化していく中で、若年層の精神的・社会的な自立の遅れが指摘されている。中学校現場では入学してくる生徒が年々幼くなっていると感じてきた。人間関係がうまく構築できず、神経をすり減らし登校拒否に陥っている生徒、また意思決定力が低く自己肯定感が持てず、進路意識や目的意識が希薄なまま学校生活を過ごしている生徒たちも少なくない。学校現場での反社会的・非人間的な問題行動の増加などが挙げら

れる中で、生徒たちに確かな学力の定着と向上を図ると共に、学校全体で情操を育む環境づくり、教育活動を根付かせ、活性化させていくことが大事であると考ええる。

J. L. マーセルは、「人間が安定した感情を持ち幸福な生活ができるようになるには、子どものときから知的経験に匹敵するだけの感情経験を与えること」と述べているが、こういった考え方は人間形成の基本理念として現代社会においても考察の原点として生き続けているものである<sup>1)</sup>。学校だからこそ得られる音楽の感動体験を通して生涯にわたっての「生きる力」の育成を図っていききたいものである。

梶田叡一は、「人間的な教育とは何か」<sup>2)</sup>の中で、「われわれは、すべての子どもに対して、責任を持って基礎的基本的な学力を実現する（学力保障）と同時に、そうした学力を形成する上での基盤となり、また獲得した学力を自他のために役立てる基礎となり、さらには生涯にわたる自己教育の土台ともなる個性的な感性・意欲・思考力・判断力・価値観・実行力等々を責任を持って身に付けさせる（成長保障）ことを目指す。われわれは、この両者を相互に関連させつつ共に重視していくことこそが学校教育に課せられた基本的使命であると考え（学力保障と成長保障の両全。）」と示すとともに、「現在の教育で決定的に不足している人間的成長の面を重視していくこと」の大切さを述べている。また成長発達の問題点である感性の未発達についてを指摘している。

筆者は、長年音楽教育に携わり、歌唱や合唱を始めとする音楽活動の指導にあたってきた中で、力を合わせて音楽表現を創りあげていくことによって得られる感動は、生徒の豊かな感性を育てていくことに気づいた。

しかしながら学校教育において音楽科授業は実質的には減少してきていることや、学年が上がる毎に声を出さなくなる状況、音楽科授業の成立が難しくなっている現状も取り上げられている<sup>3)</sup>。現行の学習指導要領では「生きる力」の理念が引き継がれている。社会のグローバル化の中で確かな学力・豊かな心・健やかな身体の調和を重視しているのである。音楽科の学習については、豊かな心の醸成を担うものとして位置づけられている。教育課程における一つのかげがえのない教科として、音楽科には、人間形成に関わる学力育成に貢献することが求められているのである。

## 2. 目的

中学校時代は自我に目覚め、身も心も急激に発達し知的・情動的な興味も高まる時期であるが、ともすれば、劣等感、無気力、無関心に陥りがちな生徒たちに、人間らしい心情や感受性を通して味わう感動体験を学校の様々な場で経験させたい。

そこで、現在の生徒たちの置かれている状況を把握するとともに、学習指導要領における、音楽科教育に託されたものや、意義について再確認していく。そして、音楽科教育の活性化について、これまでの長年にわたる学校現場の実践の一つであり、豊かな表現の工夫として、総合的な表現活動へ発展させた「合唱劇」の実践から考察する。

「合唱劇」の取り組みでは、大編成の合唱をバックに、生徒全員が個性・特性を生かし、力を合わせて感動の世界を創りあげる。先行研究において、音楽教育の有益性や合唱劇についての論文は少なくない<sup>3)</sup>。本論文の特徴は、音楽教育の有益性と活性化を音楽科を核とし、各教科と連携して創りあげる合唱劇を、長年、取り組みを積み上げてきた過程から検証することにある。

## 3. 想定される効果

自分自身が公立の中学校現場で長年音楽を通じて教育する立場にあって、音楽が様々なストレスを持つ子ども達の生活をなごませ、潤いを与えていると感じてきた。今回の検証において、以下のことが想定される。

- ① 音楽活動の中でも歌唱や合唱は歌詞（言葉の力）を通して生徒の情緒面に深く作用するため、音楽活動を通して感動体験を味わわせることができ、一人ひとりの豊かな心を育み、生きる力を培うことができる。
- ② 生徒自身が互いに協力し合い、ひとつの作品を仕上げていく喜びを体験する中で、連帯感を育み、人としての素晴らしさを味わわせることができる。
- ③ 総合的な取り組みに発展させ、一つの美しい音楽を創造しあう喜びや楽しさを体験させることが、生徒の豊かな心を育み、日頃の学校生活を安定させ、生徒たちの意欲を掻き立てることができる。

## 4. 方法

本研究は実践的方法によるものである。筆者が所属していた兵庫県西宮市における1995年から2001年にかけてのA中学校とB中学校での取り組みを分析し考察した。この合唱組曲・合唱劇の取り組みでは音楽の授業と他教科が連携し、教科で培った力を発展させ、個人や集団の思いを表現する。音楽の授業で基本指導を行い、クラス合唱から学年合唱の醍醐味を体感させ、さらに物語性のある大編成の合唱組曲・合唱劇に取り組みを発展させた。

表現活動の視点として

- ① 各自の役割（合唱・独唱・重唱・伴奏楽器・朗読等）への主体的な取り組み
  - ② イメージをふくらませた表現活動の充実
  - ③ 共に力を合わせ、より良い表現活動の創造
- とし、分析の方法は指導者の観察所見、生徒のVTR

記録、発表後の生徒の意見(成果と課題のまとめ)、保護者のアンケートの読み取りを資料として検証した。

に関する能力を図るうえで必要な言語環境を整え、児童(生徒)の言語活動を充実すること

## II 学校教育における音楽科教育

### 1. 児童生徒の問題状況

昨今、学校現場では、いじめ・不登校・学力低下・学級崩壊などの問題が、ますます深刻化し、その原因と背景は複雑になってきている。

テレビ等で報道される青少年の凶悪な事件は、都会で起こる特殊な出来事ではなく、今や、どこにでもおこり得る事件として認識される時代である。その背景としては「子どもを取り巻く教育環境や社会環境、生活実態の変化が一つの要因となり、その学習意欲や学力、体力の低下、規範意識や生命尊重に対する意識の低下、社会的自立の困難等の状況を引き起こすに至ったといえよう」<sup>4)</sup>と指摘されている。

1980年代から社会的な問題となっている「いじめ・不登校」の問題はこれまでの教育観を大きくゆるがせていると言える。増え続ける不登校生は、増加の一途をたどり、長期化し、青年のひきこもりの問題にもおよんでいる。学校や家庭、友だち関係の中でのストレスや、不満・不安が、いじめという問題に発展し、不登校の増加に拍車をかけている。そういった中で心の豊かさや情緒の豊かさといった視点で教育の在り方を見据え、子どもの全人格的な人間性を育む教育活動を進めていかねばならないと考える。

### 2. 現行学習指導要領における音楽科教育<sup>5)</sup>

現行学習指導要領においては必修教科を中心とした教育課程の編成を特色とし、生徒の確かな学力の向上を大きなねらいとしている。音楽科では授業時数の増加はないが、これまで通りの授業数は確保している。しかしながら、中学校では音楽科が授業の補充や発展的な内容を展開していた個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。

学習指導要領、第1章総則の第一「教育課程編成の一般方針」には、配慮事項として、次のような記述がある。

各教科の指導にあたっては、児童(生徒)の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語

各教科等で具体的には次のような形での言語活動の充実が考えられるとあり、その中でも、音楽に関する記述は以下のように述べられている。

(2) コミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語力として、例えば、

- ①体験から感じとったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する(音楽、図画工作、美術、体育等)
- ③合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝えあったり、共感したりする。(音楽、体育等)

今回の改訂の教育課程全体の重要なポイントとされる「体験と言葉の力」について、本論における合唱劇など体験に基づく表現活動を充実発展させていくことは、生徒の意欲や創造力の育みとなっていくものと考ええる。

### 3. 音楽科を核とした総合的な表現活動

筆者は音楽科を核とする総合的な学習について実践研究を進めてきている。音楽表現活動を主体とした音楽の授業や選択授業の発展として、行事とリンクさせ、これまでも実践してきた「合唱組曲」や「合唱劇」である。

平成10年の学習指導要領の改訂において、「総合的な学習の時間」が創設され、音楽科は実質的に授業数が減じられている。しかしながら、「総合的な学習の時間」の中で、横断的・総合的な指導を行うことが提言され、音楽科からも様々な理論や実践が提案されている<sup>6)</sup>。音楽科の活動を広げていくためにも積極的に関わっていく姿勢が必要である。

山本文茂は「総合的な学習における音楽科の基本構想は、音と言葉と動きを表現媒体としたコミュニケーションの実現を目指すものでなくてはならない」<sup>7)</sup>としている。具体的な提案として「モノドラマ合唱」を中心とした実践を提案している。「モノドラマ合唱」とは「国語教材に取材した『語り』に『バックサ운드』をつけこれを『バックミュージック』で接続的に包み込む・・・以下略」、また、「モノドラマ合唱では特に音楽科と国語科の関係を重視しているが、この方法原理を体育科や図工科との関連に拡大して適用し

ていけば『ミューズの表現』の理想は必ず実現されると考える。」<sup>8)</sup>と述べている。このように「総合的な学習の時間」が設置されてからは、さまざまな学校で、特色ある取り組みが行われている。

これまでの取り組みをより充実発展させ、音楽科を核として、各教科と連携し、学年や学校全体で協力してつくりあげてきた筆者自身の実践研究を下記に述べる。

### Ⅲ 授業の概要と実施

#### 1. 合唱劇への取り組み

合唱活動の発展としての合唱劇の実践は、小学校を中心に音楽劇というかたちで、かなり以前から行われている。また、近年ではミュージカルやオペレッタという名称で行われている。「総合的な学習の時間」が設置されてからは、他教科と連携しあい、音楽科を核とした総合的な表現活動として広く行われるようになったのである。

歌唱・合唱は器楽と違って、演奏しながら別の動作をすることが容易である。また歌うだけでなく演ずるということは、物事を注意深く観察する姿勢を養い、より豊かな表現力を導くのである。

#### 2. 指導構成

##### (1) 題材 合唱劇「象列車」

作詞 清水 則夫

作曲 藤村 記一郎

この作品は子どもの幸せと平和を願う思いを込めて、実話をもとにして書かれた「ぞうれっしゃがやってきた」を新しい合唱劇として創作したものである。東山動物園50年、国際平和年など節目の年に創作し初演されているが、命の尊さ、平和の大切さ、人間の優しさ、勇気、夢を育むことの大切さ、未来への展望を持って生きることなどを歌い上げている。

この内容は歴史的価値の高いものであり、戦争に対する危機感・平和への思いが伝わってくる作品である。合唱構成は、物語に沿って11曲の合唱、独唱、重唱、朗読などからなる。多用な表現活動を取り入れ、歌詞の内容にふさわしい伴奏をさまざまな楽器を入れて工夫することもできる。作曲者の藤村記一郎が後に、吹奏楽の伴奏も加えて作曲をしており、吹奏楽部の出番を作ることで、より総合的な表現となるのである。他にもシンセサイザー、ドラム、ギター等も編成すること

ができる。表現する側も感動体験を共有し、感性を高めることができる。

#### (2) 指導目標

<総合>

- (a) 国際平和年、東山動物園50周年の年に記念として、創作された合唱劇を取り上げることにより、歴史の事実を学習し、命の尊さ、平和の大切さ、人間の優しさ強さ、勇気、夢を育むことの大切さを知らせる。
- (b) 創造的な学習活動を通して主体的に取り組む態度を育成する。
- (c) すぐれたもの、美しいものに触れ感動できる豊かな感性と心情の育成。
- (d) 感動体験を共有することを通して、連帯感を育成する。

<音楽科>

- (a) 音楽活動の喜びを味わわせ、音楽性を伸長する。
- (b) 音楽を愛好する豊かな感性を育成する。
- (c) 生徒の個性や能力を多様な表現活動を通して生かすとともに、さらに一層伸長する。

(3) 指導計画<sup>9)</sup>

次	学習内容	時	学習活動	
			生徒の活動	教師の支援
1	合唱劇の概要を知る (総合)	1	・オリエンテーション ・活動内容を知り、物語の内容を理解する ・朗読の仕方を理解する	・活動方針や内容に関する共通理解をさせ、協力体制作りをさせ、物語の内容・歴史的背景など、興味・関心を持たせる。
2	合唱・合奏の受け持ち決定 (音楽科) 音楽表現を支える基礎的、基本的内容を培う技能を伸ばす (音楽科) 合同練習を行う それぞれの楽曲の内容をいかに表現するのか、感情移入を目指した表現力をつける。 (総合)	2	・合唱・伴奏楽器の分担を決定する。	・意欲を持って取り組めるよう創意工夫する。
		3	・練習開始。それぞれのパートリーダーを選出し、リーダー中心に練習する。	・それぞれの生徒の特技や個性が生きる選択をさせる。
		7	・各楽器の基本的奏法を身につけながら、自主的に練習する。(伴奏パート練習)	・リーダー選出にあたっては、容易な方法にならないよう助言する。
		8	・独唱・重唱練習に主体的に取り組む	・正しい呼吸の仕方、共鳴のさせ方について助言する。
10	・パート合同練習・全体合唱練習を指導者中心に行う	・各自の役割や特技を生かした取り組みをさせ、生徒が主体的に練習し、教え合い協力しあって、活動できるように助言する。		
10	・伴奏楽器、独唱・重唱、朗読を入れて、合唱練習を行う。	・ハーモニー、リズム、曲想等についての助言を入れる。		
10	・合唱劇の流れにそって、協力して美しいハーモニー作りをする。	・物語の内容にふさわしい表現ができるよう工夫させる。		
3	総合的な表現活動を目指す。合唱劇の発表による充実感、達成感を味わわせると共に共通の感動体験を通して連帯感を高める。 (総合)	11	・リハーサル	・学年代表の指揮者を中心に、組曲の流れにそって、取り組ませ、物語の内容にふさわしい総合的な表現を工夫させる。
		12	・本番	・適切な助言を入れ、練習の成果を思う存分発揮できるよう声かけをする。
4	取り組みの反省とまとめ (音楽科)	13	・取り組みの反省を個人・クラスで行い、まとめとする。	・取り組みの成果、課題を今後の活動に生かせるよう話をする。

(4) 取り組みの実際

第1次では、総合的な学習の時間(学年集会)においてオリエンテーションを行う。音楽科がリードし進め、合唱劇の意義とともに、音楽の授業を中心に、道徳や国語、社会の授業においても専門的な学びを深めながら、クラス・学年全体が一致団結して、創りあげていくことを目標とし取り組むことを理解させる。(合唱、楽器演奏は音楽科で、朗読は国語科、物語の読みとりは道徳、物語の歴史的背景は社会科)。物語の概

要説明、新聞記事や原書の紹介、この原書を合唱劇として創作した作曲者の手紙の紹介をする。原書はクラス分購入し、多くの生徒が読みたいと申し出るなど、興味を持たせることとなった。

第2次では、音楽科で役割分担を行った。できるだけ生徒の主体性が発揮できるよう配慮した。しかしながら、すべてを生徒の自主性に任せるのではなく、「自他共に認める適材適所」を大切に、「希望と納得」を共通理解させ、決定していくようにした。

指揮者、パートリーダー等の決定は、「リーダーの指示には即従う、協力をする」など約束事を確認させ、生徒の話合いで進めるようにし、安易に決定することのないよう配慮した。

リーダー中心に主体的に合唱練習を進めるようにし、教師は発声の基本や音程・声の響きなど専門的な面での指導を随時いれていった。伴奏楽器や重唱・ソロの生徒は基本的には合唱練習に参加し、個人練習は授業時間外(昼休み・放課後等)で行うようにした。

総合的な学習の時間における、合唱練習では、まず、合同パート練習を実施する。体育館を3カ所に分け、学年の教師もいずれかに参加する。学年パートリーダーがリードし練習を行う。このために事前にリーダー練習会をしておくことがリーダー性を発揮させることになる。

合同合唱練習では、ひな壇に整列するところから行うが、事前に整列しやすいよう工夫し、発表図を考案しておく。生徒の指揮者が前に立ち、練習を進める。音楽科の教師はそのそばに付き、指導にあたる。生徒の主体性を生かした活動をさせるが、音楽科教師の専門的な指導を随時入れる。また、学年の各教師から意見やアドバイスを受ける機会も設け、学年全体で創りあげる雰囲気を大切にしたい。

第3次では、前日に本番前のリハーサルを行う。入場の仕方から初め、合唱劇を通した後、指揮者による注意点の指摘、各教師の助言、そして音楽科からの助言を行い、本番前の心の準備等について話をし意欲を喚起した。このような活動課程で本番に向かったのである。

#### (5) コアカリキュラム

以下の方針に基づき、学年教師全員で取り組む。

- (a) 音楽科を中心に関係の教科が、時期・内容・分担・時間数等についての検討会を行う。
- (b) 各教科が年間計画の中に、「総合的な学習の時間」に関わる内容に必要な時間を確保しておく。
- (c) 「総合的な学習の時間」は学年全体で行うので、学年の教師全員が参加する。

1 <物語の内容>については道徳の時間に時代背景や物語の内容について読み取り、命の尊さ、平和の大切さ、人間の優しさ強さ、勇気、夢を育むことの大切さなどを感じ取らせるとともに、原書を読みあえるようにした。国語科では語り、登場人物のせりふの仕方を指導する。授業で全員が学び、決定した

流れ	曲名	活動内容	教科
1	物語の内容	・朗読	・道徳 ・国語科
2	合唱 「サーカスの歌」	・混成4部合唱 ・ピアノ伴奏 ・フルート・オーボエ ・クラリネット ・朗読・・・団長	・音楽科 ・国語科
3	独唱 「象を売らないで」	・ソプラノ代表 ・ピアノ独奏・伴奏 ・オブリガート ・・・フルート ・朗読・・・動物園の園長	・音楽科 ・国語科
4	合唱・重唱 「雪よふるな」 楽曲の内容の説明	・重唱と混成4部合唱 ・ピアノ独奏と伴奏 ・オブリガート フルート	・音楽科 ・道徳
5	朗読「動物園へようこそ」 合唱「ぞう列車」	・朗読・・・子ども達 ・混成4部合唱 ・ピアノ伴奏 ・フルート・オーボエ ・クラリネット	・国語科 ・音楽科

生徒は各自で練習を行い、国語科の教師が随時助言を行う。短時間ではあるが、国語科やクラスの短学活で発表を聴きあうなど練習を深めた。

2 <合唱「サーカスの歌」>については、混声合唱、楽器伴奏を音楽科で指導する。より感情移入できるよう、国語科では語り、登場人物のせりふの仕方を指導する。この場面では、物語の全容を予感させるような語り、初めの曲に導くような興味をそそる語りについて指導を行った。

3 <独唱「象を売らないで」> この場面では、ソプラノ代表が合唱の前に立ち、象使いの心情を思いを込めて重唱を行う。ピアノ独奏と伴奏、オブリガートをフルートは、それぞれの演奏を活かし、意見を交流しあうよう指導する。教師も助言を入れ、重唱の場面をひきたてる。動物園の園長のせりふは国語科が指導を入れる。

4 <合唱・重唱「雪よふるな」> では音楽科において、合唱及び重唱(男子5名)の指導を行う。男子生徒は合唱の前に立ち重唱を行い、その後、合唱が

続く。命の尊さ、平和の大切さ、人間の優しさ強さを込め、音楽を盛り上げていく。この場面については、命の尊さ、平和の大切さについて道徳の時間で考え合う機会とした。

- 5 <朗読「動物園へようこそ」>朗読では、苦しい戦争が終わり、夢や希望を育むことの大切さを訴えかけるような表現を目指させる。最後に合唱「ぞう列車」を学年全員が、思いを込めて歌いあげる。

#### IV 分析結果と考察

##### 1. 分析

表現活動の基盤となる大人数での合唱では、歌うことを苦手とする生徒にとっては安心して歌い、その美しさを共有できる場である。観察の中で80%以上の生徒が口を大きく開け、存分に歌っている様子を多くの教師が確認しており、自信を持たせることにもつながったと言える。

取り組みに関わった教師とともに観察する中で、伴奏楽器、重唱、朗読を入れての練習に入ると、生徒は語りによって、より物語のイメージをふくらませ、合唱の響きや曲想が変わっていくことを実感している。また、ピアノだけでなく、様々な楽器の伴奏が大合唱のバックに響き、物語の流れを盛り上げた。登場人物のせりふの生徒も、初めは棒読みに近かったものが、国語科の指導と練習に励み、大合唱に包まれる中、迫真に迫る語りになっていき、バックの合唱の生徒たちを驚かせていた。重唱(男女各5名)の場面では200名の仲間を背に、登場人物の心情になりきるように存分に歌声を響かせた。この場で歌うために個人練習をよく頑張った生徒たちである。物語の一つの山である動物が射殺される場面で、銃声を教師に入れてもらうなどする中で、生徒たちはどんどん物語の中に入りこんでいった。このように、生徒一人一人が意欲的に、力を合わせ創りあげる合唱劇は、教育効果の高い取り組みだったと言える。

取り組み後、自己評価とともに感想・意見をまとめさせた。その結果、多くの生徒が達成感・充実感に満たされた様子が見えられた。以下、取り組みを終えての生徒の感想・意見を紹介する。

<視点>

- |                                    |
|------------------------------------|
| ①各自の役割(合唱・独唱・重唱・伴奏楽器・朗読等)を主体的に取り組む |
| ②共に力を合わせ、より良い表現活動をめざす              |
| ③イメージをふくらませた表現活動                   |

おおむね、生徒の感想・意見は、次の視点に関するものに分けられた。

「声がすごく出ていてうれしかったです。②混成4部で、すごくハモっているところもあり、練習の成果が良く出ていたように思います。3年間いろんな組曲をやったけれど、①③今回の合唱劇は本当に詩について深く考え、願いや気持ちをこめて歌えたと思います。聴いていた人たちに歌声が届くだけでなく、気持ちも届き、大成功だったと思いました。」

3年生・女子

「歌っている僕自身、③毎回さむけがする部分があるほど、心がこもった歌だと思います。だから聴いている人たちもとても、身動きができないくらい感動したと思う。何度も歌を歌っているが、さむけがするなど一度もなかった。さむけとっては悪いですけど、③何か熱いものがおなかの中からこみあげてくるのです。①こんなに心を打つ歌を歌ったのは初めてです。初めは恥ずかしいと思ったけれど、そんなことはない。素晴らしい取り組みと素晴らしい発表でした。」

3年生・男子

「私は『象列車』を歌って、①生まれて初めて人に聞かせる歌を歌った気がしました。私たち3年生の歌を聴いて、泣いている人を見た時、すごくうれしい思いが込み上げてきました。②このメンバーでこの学校で、この歌で本当に良かったと心から思いました。『この歌をここまで歌いこなし、人に感動をあたえられるのは、私たち3年生しかない。』とそう思います。この先、こんな形で合唱劇を歌うことなんて多分一生ないと思います。本当に素晴らしい思い出です。」

3年生・女子

印象に残る感想を取り上げている。1年の頃は、やんちゃで、すねた面もあり、口も開けずに歌うといった男子生徒が、合唱や合唱劇の取り組みを重ねる中で、共に歌い合うことの喜びに心を動かされ、「熱いものが、お腹からこみあげてくる」といった感想を残している。まさに音楽活動が生徒の心を育み、豊かな心に成長させる有効な取り組みであったことが確認できる。

視点①に関する感想に下線を付している。生徒の感想から、各役割に主体的に取り組む、深いところまで入り込み発表し、達成感を得ている様子が見えられた。生徒の意欲を喚起させていることが感想や意見から読み取れるのである。

その他の感想にも「歌い終わった後、いろんな気持ちがこみ上げてきた。歌いきったぞという達成感、昼休み頑張った独唱練習を思い出した。最高の発表ができた。」

「楽器アンサンブルでフルートがうまくいって、本当に良かった」などがある。

楽器演奏については、生徒のやってみたいという意欲を大切に、ピアノ以外の複数の楽器を加えていった。演奏しやすく編曲するなど、工夫を重ねることで、様々な楽器演奏が加わり、合唱劇はさらに豊かな表現ができるようになった。生徒が主体的に意欲的に取り組むことによって、さまざまな表現力を高め、身につけることができるのである。

また、共に取り組んだ他教科の教員から「①学年合同練習はとても良い刺激になるようで、その後の成長が感じられる良い取り組みだと思いました。」

「①生徒の持ち味を発揮させる取り組みです」

「①生徒の頑張りが伝わってきて、気持ちの良い合唱でした。生徒たちをほめてやりたいです。」など。

視点②については下線②が示すように、仲間と共に歌い上げ、創りあげる喜びが、現れている。

「②私たちの音楽を伝えられた。クラスや学年の仲間も深まって、練習してきて本当に良かった」

他の教科と連携し音楽科を核とした総合的な表現活動に取り組む中で、生徒たちは仲間と協力して活動する大切さを学びとっていることが、感想や意見から窺える。

教師からは「②総合的な学習の時間で、全学年がそろって練習するのは、本当に集中できてよいと思う。」

音楽科を核とする活動を進める中で、連帯感が強まり、生徒の生活が落ち着いた状況になっていくことを、関わった多くの教師が実感している。

視点③については下線③で示している。「詩について深く考え・・・、ねがいや気持ちを込めて・・・、さむけがする・・・。」といった表現から、各生徒がいかに物語の世界に入り込み、イメージをふくらませ表現活動を行ってきたかがうかがい知ることができる。

歌詞を読み取り合唱するだけでもイメージを促すことはできるが、演じること、物語に入り込み劇化することで生徒たちの内面にある感性を刺激するのである。生徒たちはイメージをふくらませ、自分の思いや感情へと発展させる。生徒が感じたことを自由に表現することを多くの場面で体験している。教師のイメージを初めから前面に出すのではなく、主体的な表現活動を大切にすることで、生徒自身のイメージが自由に広

がり、発表後の満足感、成就感を生み出しており、想定される以上の効果が現れていた。

## 2. 考察

これまで筆者が実践してきた合唱組曲・合唱劇の取り組みでは、合唱を中心とするが、独唱、重唱の場面をりいれるなど、生徒の個性・特性を発揮させ、より豊かな表現を目指すのである。

想定される効果は

- ①音楽活動を通して感動体験を味わわせる。
- ②一つの美しい音楽作品を創り上げる中で連帯感を育む
- ③音楽活動において豊かな心を育み意欲を掻き立てる。

であった。総合的な表現活動である合唱劇に取り組む課程で、観察を通してや、生徒及び、ともに取り組んだ教師の感想や意見から、上記の想定した効果が育まれている様子が確認できた。

1年生から合唱組曲や合唱劇に取り組む3年目となると、自分の得意な楽器を希望する生徒や指揮者、朗読、ソロをしたい、という要望も積極的に出てきている。実は、1年で初めて取り組んだ時は、人目を気にしたり、自信がもてなかったりで、立候補者など一人もいなかったのである。それが、協力しあって、美しい作品を創りあげ、達成感を感じるとともに、仲間と感動を共有する中で、このような生徒の積極性、意欲的な態度をを引き出している。ともすれば無気力であったり、指示待ちであったりする中学生を意欲的な態度に変容させ、他の生活にも活かされていくのである。

音楽を核とし、教科の学びだけでは得られないより豊かな学びがあり、総合的な力の向上を生徒自身が実感し、その後の学校生活に変化を与えている。クラスの団結力が高まり、これまでより授業において発言しやすいムードとなったり、教え合い学習が活発になるなど、授業が活性化していることが、各教師の感想や意見から明らかになっている。生活面において、連帯感のうすいクラスでは、人間関係が殺伐としているが、協力体制が強まると「いじめ・不登校」といった問題にも良い影響を与えているのだ。長年音楽活動に取り組むことにより、学校生活が落ち着いていく様子を、筆者を含め仲間の教師は実感してきた。

合唱活動では仲間と声を合わせて一つのものを作り出すことに喜びを見いだせた時、生徒たちの心は大きな感動に包まれる。このような多くの感動体験を通し

て生徒たちの音楽に対する感性がより育まれる。こういった感動体験によって、生徒一人ひとりが、「自分の存在に自信と誇りを持つこと」につながっていくのである。音楽がわかることの楽しさ、できることの楽しさなどを学校で感得させることが大事だと考える。

保護者や地域からは毎回下記のような感想が寄せられる。「いつもながら、ステージ発表はすごい、素晴らしいの一言につきます。今年もステージ発表に、思わず涙が出て、感動させていただきました。ご指導いただきました先生方にも感謝いたします。」

「楽器の担当で、毎日毎日、発表のための練習をしていました。自分の為、ではなく、みんなの為に努力すること、とても良い経験になったと思います。」

「文化祭の近づいた日、学校に出向くと、子どもたちが教室や廊下、グラウンドで集まって練習をしているのを見て、がんばろうとしている姿、発表前に団結している姿が心に響きました。」

「3年生の合唱劇は、みんなと一緒に全力を尽くそうという思いがかんじられ、大変感動いたしました。」など、会場が一体感に包まれ、感動を共有している様子が感じとれる。保護者からは生徒の熱演に感動し、励まされたり、エネルギーをもらったと喜びを表した文章が多く見られた。生徒の団結する姿が保護者や地域の方々に伝わり感動させていることがうかがえた。生徒は大きな拍手や賞賛の言葉にはげまされ、一人一人が自信を持つことにつながっていくのである。心をゆさぶり、人としてもっとも大切な心の育みを行っていく取り組みであると言える。

生徒一人ひとりの可能性を具体的に開く創造的な授業の実践とともに、感情や情緒を育み、心を豊かにするための教育活動を進めていかねばならないと考える。

## V 結論

生徒たちの歌声が保護者や地域にとって、楽しみの一つになっているという意味では、地域の文化として浸透し、根付いてきたと言える。

音楽には共に演奏することで連帯感を持たせる力がある、といわれるが、「合唱劇」の取り組みにおいても確認することができた。孤独感を抱きやすい思春期の中学生には、前向きに生きるエネルギーになるこの連帯感が必要である。しかしながら限られた時間数で、生徒が心揺さぶられるような一体感を感じる授業を成立させるためには他教科や学校行事と連携しなが

ら計画的に行っていく必要がある。

多くの中学校が力を入れている合唱活動では、学級・学年・学校全体で心を合わせ鍛え合い、美しいハーモニーを創り上げ感動体験から、連帯感、達成感を育んでいる。合唱コンクールや文化祭等は保護者、地域の方々が生徒の全力を尽した取り組みを鑑賞する中で、大きな声援をいただき、豊かな時間を共有する場となっており、学校への信頼へとつながっているのである。

学校全体で取り組む行事は、心豊かにたくましく生きる力を育む大切な活動である。文化祭や音楽会などで音楽科の活動を広げ、深め、歌声の響く学校づくりを目指していきたいものである。1年間の学校生活の中で、音楽活動は学校行事や生徒会行事において、行事そのものを充実させ豊かな活動に盛り上げている。斉藤喜博は「授業」と「行事」と「芸術教育」とは学校教育での3つの大きな柱であり、いずれも広い意味で学校教育での授業であると述べているが、今日もお生き続ける教育活動の原点であると考え<sup>10)</sup>。

皆川達夫は、皆で声をあわせて歌う、つまり＜合唱する＞ということも、人間が何らかの形で集団あるいは社会を作りはじめたのと同時に、始まったものと考えられること、＜合唱する＞ということは、＜歌う＞ということと＜集団を作る＞ということ、人間のもっとも基本的な行為に、深く根ざしたものであると述べている<sup>11)</sup>。

このように人間の根源的な活動である音楽活動は学校の生活全体を豊かで潤いのあるものとするとともに、情操豊かな生徒を育む土壌ともなっていることが、長年にわたる合唱・合唱劇の取り組みにおいて実証された。

限られた時間数ではあるが、音楽科(基礎・基本の習得)の時間を核として、学活行事や総合的な学習の時間において、音楽活動を発展させていかねばと考える。

教育現場では、ともすれば必修授業の縮小や学校行事の精選の名のもとに音楽会やコンクールの中止など徐々に学校教育における音楽科の位置がせばめられていくのが現状である。しかしながら、合唱劇のように、授業だけでは実現しない、音楽科を核とした総合的な表現力を伸長する大切な活動の場である。クラスや学年の仲間との連帯感が生まれ、日頃の生活を活性化させ、各授業に取り組む態度にも良い影響を与えているのだ。

学校教育全体計画の一環として意図的に計画的に対

応することも大切であり、このような活動が音楽活動の内容充実を図る要因となりうるものである。

音楽科教育は人間の成長や発達において、欠くことのできないものである。人と人とのつながりの中で得られる音楽の喜びや感動こそが、豊かな心を育成し、調和のとれた人間形成につながり、生きる力の基盤となっていくものと考えられる。

11) 皆川達夫『合唱音楽の歴史』全音楽譜出版社 1965

## 引用・参考文献

- 1) Mursell, J, L, 「Human Values in Music Education」美田節子訳『音楽教育と人間形成』音楽の友社 1967 P.39
- 2) 梶田叡一「人間的な教育とは何か」、『教育フォーラム』第4号 金子書房
- 3) 立石裕子「中学校音楽科における歌唱・合唱活動の在り方に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』2004.3  
西園芳信 小椋里美 川畑啓子「授業づくりプロジェクト子どもが歌いたくなる合唱指導の方法―諸要素や曲想と子どもとの関わりに注目して―」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要』2008  
千成俊夫「音楽の授業成立に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』1975.12  
瀧明知恵子「音楽科教育の有益性における一考察～歌唱・合唱活動を通して～」『奈良学園大学紀要』2015.1
- 4) 梶田叡一, 山際隆『教育の最新情報』2009 P.9
- 5) 文部科学省『中学校学習指導要領音楽科編』2008
- 6) 加藤富美子『横断的・総合的学習にチャレンジ』音楽の友社 1997, 八木正一・吉田孝編著『音楽の授業―総合的な学習をどうつくるか』学事出版 1998, 加藤靖編著『音楽で拓く総合的な学習』教育芸術社 1999 他
- 7) 山本文茂「教育課程の方向と音楽科の役割～＜総合的な学習＞にどう関わるか～」『音楽教育』教育芸術社 1998 P.4
- 8) 山本文茂「モノドラマ合唱の教育的可能性」『音楽の発見「ミューズの表現」』音楽の友社 1997 P.109
- 9) 瀧明知恵子『新学習指導要領実施 活気あふれる学校づくり～確かな学力・情操豊かな人間性を育む～』株式会社ERP 2014 P.49
- 10) 齊藤喜博『授業』国土社 1963